

日本愛妻会と 横浜ペンクラブ②

一九五〇年代から一九六〇年代にかけての横浜では、文化人や政財界人による文化行事が最盛期を迎える。

前号掲載の「日本愛妻会と横浜ペンクラブ①」では、戦後復興期における文化行事の変遷を述べ、文化人や政財界人がどのようにその文化行事に関わっていたかを紹介した。

戦後の横浜は中心部の接収が長く続き、復興が遅れた。そのため、横浜の文化人たちは、文化行事によって復興の気運を盛り上げようとしたのである。その活動の中で、いくつかの組織が生まれた。日本愛妻会は、文化人と政財界人が共に参加する、社交クラブ・文化サロンの役割を果たし、横浜ペンクラブは横浜の文化人を結集して文化活動を行う拠点となった。

この両組織を足がかりとして、横浜の文化行事はさらなる展開を見せていく。今回は、復興期から高度経済成長期にかけて、文化行事がどのように変化し、それを支える人々はどのような活動を行っていったのか、さらに見ていくことにする。

戦後の文化行事

戦後の文化行事の特徴の一つとして、音楽・舞踊・演芸・演劇および絵画・

文学・写真などの作品を、市民一般から公募して審査し、優秀作品を芸術祭・文芸祭と称して発表する場を設けたことが挙げられる。

一九四六（昭和二一）年九月の伊勢佐木復興祭と同年十一月の芸能コンクールは、こうした文化行事の先駆けであった。芸能コンクールはその後毎年行われる第一回目であり、オール横浜総合芸能コンクールと銘打ったところにその意気込みを感じることができ。当時七歳の加藤和枝、後の美空ひばりも二五日に登場している（『神奈川新聞』46、11、26）。

また、一九五〇（昭和二五）年には、横浜を代表する行事である開港記念祭



第1回日本愛妻会新婚想い出の会 箱根小涌園にて
中央で左手を挙げているのが北林透馬 1952年11月20日
牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

が復活する。当時は、東京で開催された「港祭」と混同されないよう「ハマ祭」と呼んでいた（『神奈川新聞』50、5、30）が、翌年からは「みなと祭」となった。

そして、一九五三（昭和二八）年からは、みなと祭国際仮装行列が毎年行われるようになる。一方、市が主催あるいは共催する文化行事は、一九五二（昭和二七）年一〇月一日に所管が教育委員会に移ると共に再編され、秋の横浜文化祭の一環として、芸能コンクールをはじめとした様々な発表会や展示会が開催されるようになる。

いずれの行事も、市民一般や地元企業の参加をうながし、審査や企画・運営では地元文化人が参加するなど、市民と文化人の総力を結集しようとするまさに市民ぐるみの行事であった。

みなと祭と国際仮装行列、そして横浜文化祭が、毎年恒例の行事として定着したことによって、戦後復興のなかで果たすべき文化人たちの役割は一定の成果をみたといえよう。横浜の文化人たちは、市の文化行事に協力するだけでなく、独自の活動によって横浜の文化を育み、発展させていくことにさらに力を入れていくようになる。一九五二年一月二〇日に日本愛妻会、翌年七月一三日に横浜ペンクラブが発足しているのは、こ

のような文化行事の流れのなかで決して偶然とはいえない。

横浜ペンクラブを中心とする文化行事には、二つの要素があった。一つは、日本愛妻会からヨコハマ話の波止場へと続く文化人と政財界人の交流の場、文化サロンとしての役割である。もう一つは、横浜に縁のある文人たちを顕彰する会や文学散歩など文芸そのものに関わる催しで、横浜文学散歩開催を契機に横浜文芸懇話会が結成される。

これらの活発な動きの背景には、各組織や行事の事務局を一手に引き受けていた牧野勲が、一九五五（昭和三〇）年に横浜商工会議所の議員を引いて、これまで以上に自由に活動する余地ができたという事情もあった。

ここで改めて、これらの諸組織結成の経緯と実施した文化行事について、時間を追って紹介すると共に、その時代背景を探ってみよう。

横浜ペンクラブの発足

一九五三（昭和二八）年七月四日、横浜ペンクラブと一九五三年会の共催で開かれた「混血孤児を幸せにする集い」（『神奈川新聞』53、7、4）から、もう一度振り返ってみよう。一九五三年会、通称五三会とは、後の「レミの会」のことである。「レミの会」は、平野威馬雄を中心として佐藤美子・江川宇礼雄ら、外国人を親に持つ文化人が同じ境遇の孤児たちを援助しようと結成した会である。米軍施設が市内に多く

あった横浜ならではの社会的活動が、横浜ペンクラブの出発点にあったことは注目される。

そもそも横浜ペンクラブは、「海港文学の伝統の上に、新しい文学地図を練りひろげる」ことを目的に、作品集「海港文学」を発行するなど文芸活動を行う組織として結成された。しかし、「規約」に「各種文化集會に講師を派遣する」など、「横浜文化の伸長に役立つ事業に協力する」ことをうたっているとおり、文芸面での社会的活動が横浜ペンクラブの中心的活動となっていく（「牧野勲関係資料」）。

発足後の横浜ペンクラブが最初に取り組んだのは、横浜に縁のある文化人を顕彰する活動であった。一九五三（昭和二八）年七月一日に南区の増徳院で開催された横浜縁故文人追悼会では、山崎紫紅・有島武郎・直木三十五・長谷川時雨・小島烏水・北村初雄・岡倉天心・岸田吟香ら二二名におよぶ文人たちを追悼した。当日の夜は、精進落としと称してさくらポートに場所を移して、懇親会が催された。このように文化人が交流する場所を提供するの、横浜ペンクラブの重要な役割の一つであった。

続いて翌一九五四年二月一日、山手の外人墓地でワグマン追慕式が開催された。二月一四日は、一八九一（明治二四）年二月八日に亡くなったワグマンが、外人墓地に埋葬された日だという。当時の新聞記事によれば、同

年四月から開催される開国百年祭を記念して計画されたともいわれる。

当日の出席者を見ると、北林透馬・牧野勲ら横浜ペンクラブの会員に加え、半井清横浜商工会議所会頭が出席し、平沼亮三横浜市長名の献花などもあった。前号で紹介したように、いずれも日本愛妻会の会員でもある。つまり、日本愛妻会と横浜ペンクラブは、横浜市の主要な政財界人と文化人たちのネットワークを形成しており、文化行事の実行においてこのネットワークがおおいに威力を発揮したのである。

横浜文学散歩と横浜文芸懇話会

次に企画されたのが、一九五五（昭和三〇）年三月六日に第一回が開催された横浜文学散歩である。その発端については、牧野勲が『馬頸糶雑記』（有隣堂、一九八四年）のなかで、野田宇太郎の東京文学散歩に刺激されて提案したと述べている。また、海老沢欽三が、やはり短歌文学散歩の経験から提案して、牧野と横浜市文化部の中山富久の賛成を得て実施したと述べている（『横浜文芸懇話会会報』第二二号、一九七八年五月一日）。

誰の発案というよりも、これら三者の考えが一致して横浜文学散歩が実施されたことだろう。そして、その第二回が行われた翌一九五六（昭和三一）年春に横浜文芸懇話会が発足している。内田四万蔵氏は、第一回が横浜市教育委員会主催で行われたのに対

し、横浜ペンクラブ他の各団体を一つにまとめた組織が主催すべきだという意見があり、横浜文芸懇話会が結成されて、第二回以降の文学散歩を主催したと述べている（同前第九九号、二〇〇三年四月一八日）。

なお、第二回文学散歩の期日については、『横浜文学散歩』（横浜市教育委員会、一九八八年三月）や『市政概要 一九五六年版』では三月二五日とされているが、新聞報道は四月一日開催を予告している（『神奈川』56、3、17）。

初期の文学散歩の講師には、北林透馬・牧野勲の他、椎橋好・飯田九一・飯岡幸吉・石井光太郎らが当たっている。文芸懇話会の会員である海老沢欽三・扇谷義男・早川右近らも、参加したものと思われる。内田氏も述べているように、これらの人々が直接横浜ペンクラブの会員であったかどうかは不明である。少なくとも、北林・牧野以外は横浜ペンクラブ結成式には出席していない。だが、いずれも横浜の文化行事において、審査員などを務めている人々である。横浜文学散歩と横浜文芸懇話会は、横浜の文化人を結集する行事であり団体であったといえよう。

一方、横浜ペンクラブ自体が主催する行事は、文化人たちの交流の場を企



伊勢ぶら会 横浜港での記念撮影 1957年10月13日
牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

画することに力を入れていく。日本愛妻会は、横浜ペンクラブ発足以前に始まっているので、横浜ペンクラブ主催としては、一九五七（昭和三二）年一〇月一三日に行われた伊勢ぶら会が、その始まりといつてよいだろう。「どっこい、こちらで伊勢ぶら会」と銘打ったこの集まりは、東京・横浜の作家や画家など文化人を集めて、横浜の文学散歩のあと、皆で伊勢ぶらをしを催すというものであった。一〇〇人を超す文化人が集まったという。

それぞれ小旗と風船を手を持った著名な文化人たちが街中を練り歩く姿は、報道関係者だけでなく一般市民の



第3回ヨコハマ話の波止場 中央にゲスト万里昌代 1958年2月5日
牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

第一回の参加者が五二名、第二回は八八名、その後も一〇〇人前後の参加があったという。第二回のゲストは芥川賞作家菊村到、第三回は女優の万里昌代、第四回は同じく女優小山明子、第五回は

伊勢ぶら会から約二か月後の一二月五日に、尾上町の横浜会館で「ヨコハマ話の波止場」が開催された。翌一九五八(昭和三三)年一月五日開催の第二回から「ヨコハマ話の波止場」と改称され、ほぼ毎月例会が開催されていく。話の波止場は、元は東京懇話会横浜支部の活動として始まった。東京懇話会とは、東京の作家・文化人たちが中心となって、一九五六(昭和三一)年三月に発足した組織である。機関紙「話の広場」を発行するほか、毎月一日と一五日に話題の人の話を聞く例会を持つていた。牧野勲がその世話人に加わっており、横浜でも例会を開こうということになったのである。

注目を集めた。この会を計画した実行委員には、志村立美・松島一郎ら画家や平野威馬雄・北林透馬・扇谷義男、そして牧野勲らが名を連ねている。主催は横浜ペンクラブで、伊勢佐木町商店街などが協賛した。発起人には、飯岡幸吉・飯田九一・海老沢欽三といった文芸懇話会会員のほかに、半井清や中山富久、佐藤美子や渡辺はま子といった名前も見られる。会の主旨は、にぎわいが甦りつつある横浜を案内しようという意図と共に、翌年の開港百年祭の前後祭だと意義づけられていた。

ヨコハマ話の波止場

が加わっている。

横浜商工会議所会頭の半井清を代表に、世話人には、飯田九一・扇谷義男・加藤衛・北林透馬・早川右近・平野威馬雄・牧野勲・松島一郎・松本薫といったおなじみの名前が並んでいる。半井・北林・牧野・松本など、日本愛妻会会員と重なっている者もいるが、どちらかといえば政財界人中心であった愛妻会に対して、話の波止場はより幅広い文化人が集まった。その後も世話人は増加し、海老沢欽三・佐藤美子・椎橋好・平野零児・渡辺はま子らが加わっている。

話の「広場」が開催された。翌一九五八(昭和三三)年一月五日開催の第二回から「ヨコハマ話の波止場」と改称され、ほぼ毎月例会が開催されていく。話の波止場は、元は東京懇話会横浜支部の活動として始まった。東京懇話会とは、東京の作家・文化人たちが中心となって、一九五六(昭和三一)年三月に発足した組織である。機関紙「話の広場」を発行するほか、毎月一日と一五日に話題の人の話を聞く例会を持つていた。牧野勲がその世話人に加わっており、横浜でも例会を開こうということになったのである。



ワグマンの墓に献花する半井清横浜市長 1963年2月8日
牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

一九五九(昭和三四)年一月五日の第二一回までは、ほぼ定期的に開催され、翌年七月と九月に第二二回から二四回まで、そして一九六一(昭和三六)年八月三十一日に第二六回としてキリンビール工場の見学を行った後、開催の記録は途絶えがちになる。「牧野勲関係資料」で確認できるのは、一九六三(昭和三八)年六月二八日の第三一回と一九六九(昭和四四)年七月九日の渡辺はま子がゲストの例会のみである。だが、これらの記録から断続的に開催されていたことが推測される。他方、日本愛妻会の活動の記録は、一九六〇(昭和三五)年一月二三日の九周年ガーデン・パーティーを最後に途絶えている。

ワグマン祭とヨコハマ散歩

が、主催に加わっている。まさに、「ヨコハマ在住の全文化人」を総動員しての企画だった。諸団体に協賛を求める文書(「牧野勲関係資料」)に、「開港百年祭に際しては盛大なワグマン追慕式を執行、内外文化人の参列を求めて、その序幕を飾りたい」とあるように、開港百年祭にちなんだ企画であることをうたっている。さらに、ワグマンの墓地と元町周辺の史跡に標識を建てることを計画している。これは、後に様々な記念碑を建てていく活動の先駆けといえよう。また、墓前での追慕式の後、場所をクリフサイドに移して、ポンチ祭と称して懇親会を開催した。後に、ワグマン追慕式はポンチ・ハナ祭として引き継がれていくことになる。期日については、一九五四年の第一回目は



ヨコハマ散歩ガーデン・パーティー 1960年6月27日
牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

たが、雨のため氷川丸見学を行った(『神奈川新聞』61、7、3)。

また、横浜ペンクラブとそのネットワークが機能を発揮した事業として、直木三十五宅跡記念碑の建設がある。これは、一九六〇年に直木賞の選考委員でもあった大佛次郎が呼びかけ(『神奈川新聞』60、7、19・20)、平野零児や横浜ペンクラブがこれにこたえて、具体化したものであった。平野零児がその経緯を述べているが、平野と北林・牧野らが直木宅跡を視察した後、横浜ペンクラブが記念碑を建てることを決めたという(『毎日新聞』60、7、28)。

北林・牧野らは、当時の横浜市長半井清や内山岩太郎県知事をも巻き込み、募金を募り、一〇月六日に記念碑除幕式を開催した。

ネプチューン祭

日本愛妻会や話の波止場の例会が途絶えがちになるなか、一九六三(昭和三八)年一月一〇日に、ヨコハマ話の波止場主催でネプチューン祭が開催されている。これは、そもそも横浜詩人会が発行していた作品集ネプチューン・シリーズの出版記念会を発端としていた。詩人会の近藤東が牧野に相談したところ、話の波止場主催で開催することとなったのである(『ヨコハマ詩人会通信』No. 5、一九六三年二月一日)。牧野らにとっても、日本愛妻



第1回ネプチューン祭でミスヨコハマから花束を贈呈された牧野勲 1963年1月10日
牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

会に代わる、定期的な行事としての意味があったのかもしれない。

第一回はホテル・ニューグランドで開催され、県や市の観光協会、横浜詩人会・横浜ペンクラブなどが後援し、半井市長・内山知事の他田中省吾横浜商工会議所会頭らが出席している。この会は、毎年海神ネプチューンを選び、海や港に貢献した人を表彰し、懇親を図ろうとするものであった。政財界人も参加するなど、日本愛妻会の主旨を引き継ぐ行事だといえよう。「牧野勲関係資料」では、一九六六(昭和四一)年の第三回まで記録がある。

ところで、毎年開催される文化行事は、次第に横浜文芸懇話会が主催するようになっていった。ワグマイン・ポンチ花祭りや横浜文学散歩の他、一九六六(昭和四一)年五月八日に歌僧大熊弁玉を記念して開催された弁玉祭や、詩人佐藤惣之助にちなんだ伊勢ぶらザクの会などである。

このように、高度経済成長期に入っ

ても、様々に姿を変えて文化行事が催され、日本愛妻会と横浜ペンクラブに続いて、横浜文芸懇話会とヨコハマ話の波止場という新たな組織も生まれた。これらの組織は、市長や商工会議所会頭ら

も参加していたとはいえず、決して官製の組織ではなく、在野の文化人が中心となつて主体的に組織したものであった。横浜の文化人と一部の政財界人は、公職にある者もそうでない者も、党派や思想的立場の枠を超えて結集したのである。そして、各組織が主催する文化行事は、横浜の復興を盛り立て、高度経済成長期にも、交流を深める場として、横浜の文化を充実させ発展させていく場として機能し続けたのである。

これらの組織や行事を企画し、具体化し、運営する上で、北林と牧野が果たした役割を忘れるわけにはいかない。市長・商工会議所会頭を歴任した半井清の存在も、大きかった。こうして、日本愛妻会・横浜ペンクラブそして横浜文芸懇話会・ヨコハマ話の波止場は、横浜の戦後史においてユニークな組織・行事として、その名をとどめることになったのである。

(羽田博昭)

二月一四日に開催されたが、この年から命日の二月八日に開催されるようになった。

この後、横浜ペンクラブは、東京の作家たちとの交流行事としてヨコハマ散歩を、一九六〇(昭和三五)年六月二七日に開催する。市長公舎でガーデン・パーティーを開き、それからバスに分乗して北林透馬と平野威馬雄の案内で文学散歩を行った。東京作家クラブとの共催だが、横浜ペンクラブが東京の作家たち一〇〇人ばかりを招待したかたちである。先の伊勢ぶら会と同様、横浜の復興ぶりを東京の作家たちに見てもらおうという主旨で、同日夜には代表者八人による座談会も開いている(『神奈川新聞』60、7、6)。翌年も同日に、横浜港見学を予定してい